「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第１回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。
一部の個人名をアルファベット表記しています。

「なぜ、日本人は中国語会話が下手なのか」

河南省　王運涛

中国では毎年「漢語橋」大会が行われている。毎回、多くの日本人が参加しているものの、優勝するのは得てして日本人ではない。

日本人の参加者が話す中国語は、多くがぎこちなく重たるい印象を残す。そうなってしまう原因は複雑だ。日本人留学生は相対的に内向的で、公共の場で話すことを好まない。人付き合いにものめり込むこともないし、中国人の友達も少ない。そういうことが積み重なり訓練する機会を逃してしまうことが多いのだ。語学の鍵は訓練だと言うのに。中国で勤務する日本人は、たいてい日系企業の管理職である。主観的には口語レベルを上げたがっているのに、一般の中国人と交流する機会は少ない。しかも、日系企業の中国人従業員は、多くが日本語を理解できるうえ、日本人という集団の性格上、彼らは付き合いの垣根を越えることができず、中国人の中に溶け込むことができない。口語レベルが高くないのも当然なことである。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、彼らが勉強嫌いだからでも、文法を軽視するからでも決してない。むしろ、その逆で、彼らはみんな謙虚で、礼儀正しく、勉強好きで、文法を重視するのだ。日本人はとても真面目に学習する。音声に対しては、その規則性に気を配り、特に会話経験のない言語については、より気を遣う。彼らは具体的な発音の要領をとても重視する。中国語に特有なものを発音する場合では、舌先の正しい位置、口腔の具体的な形など。彼らは１つ１つのキーポイントを理解しようとする。それらのキーポイントを把握すれば、正確な発音ができると考えているのだ。言語の学習にとって、勉強好きで規則を重視することは、プラスの作用があると思われる。特に、研究を目的とする学習者には助けとなる。しかし、規則性を重視しすぎると、発音中に前後の文から影響を受けて生じる音の変化といった例外的用法について、受け入れることができなくなってしまうのである。ある発音が他の言葉の影響によって変化すると、彼らにとっては困難なものになってしまうのだ。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、学習過程における彼らの集団への依存心の強さとプライドの高さに関係している。日本人留学生は、授業中にグループになって課題に取り組み、一緒に朗読したり討論したりすることを好む。自分に考えがある時でも、他人の同意を得てからでなければ、公表しようとはしない。日本人が過度に集団を頼ってしまうのは、東方国家の強い家族意識から来ているものかもしれない。集団に頼ることで自分が直面するリスクを低減するのに慣れているのだ。語学学習にとっては、集団への依存にも一定の利点がある。言語は必然的に交流の中で現れるものであるため、言語の訓練には相互協力が必要となるからである。しかし、過度に集団に頼ってしまうと、学習者の主観性や能動性を発揮することができなくなってしまうのだ。チームが共同で課題を遂行すると、メンバーの焦燥感は低下するが、教師はその状態を具体的に把握することができず、個別に指導することができない。プライドが高い日本人留学生は、言い間違いをして他人に笑われるのを恐れる。十分な自信がなければ公の場で発表することができないのだ。発表の場が開かれていればいる程、彼らはさらに他人の見方を気にするようになる。しかし、自ら口を開かず、公の場で話をしようとしなければ、周囲の人からのフィード・バックを得ることはできず、発音上の間違いを直すこともできない。プライドを重んじて発話を避けていると、学習が困難であっても、それを中国語教師に伝えることはできない。教師がニーズを把握できなければ、多くの時間を無駄にし、とうに理解されているはずの内容をまた講義することになるのだ。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、日本人の曖昧でおとなしく内向的な性格とも関連する。日本人は人付き合いでも失敗を恐れ、発話する側より聞く側に回ってばかりいる。はっきり言わなければならない場

合であっても、可否を断言することはなく、余地を残しておくのだ。日本人留学生は、一般的に公の場で人と意見が食い違うことはない。たとえ同じ意見でなくても、そうした違いを直接的に表現することはなく、やや婉曲な方法で暗示するのだ。相手が理解できない場合、得てして先に賛同してしまうことによって争いを避けている。そのため、日本人留学生が教師に質問をすることは少ない。指名されて問題に回答する時も、探りを入れるような語気で話しながら教師の反応を観察し、自分の回答を調整してしまうのだ。日本の留学生は静かで内向的である。いつも黙っていることが多く、大言壮語することは少ない。表情も言葉も実に曖昧で、腹の底で何を考えているのか分からないと思わせる。こうした性格的特徴は、日本の伝統文化に根ざしているのかもしれない。日本文化においては、口数の少ない人物が得てして修養を積んだ人のように思われている。語学学習について言えば、曖昧さと内向性はとても不利な要素である。言葉は“話す”ものであるので、たくさん話して練習しないと発音は向上しない。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、日本人が中国語を学習する方法とも関連する。日本人は中国語を学ぶ時、電子メールや手紙を使って学習内容を探求するような方法を好み、直接交流するような方法を好まない。学習上の困難を書き記すことはあっても、口に出して述べようとはしないのだ。大多数の日本人は、書面資料と向き合って、細かな文法に関心を注ぐ。語学学習を科学研究のように扱う者さえいる程である。こうした厳格な態度は、日本民族が階級制度を重視するのと大いに関係しているのかもしれない。日本は階級社会であり、誰もが社会の中で特定の身分を持っている。勝手にその枠を越えることはできず、何事も手順に従って行い、勝手に手順を乱すことはできない。言語学習にとって、文法を重視することは、文章の理解や作文における誤りを減らすことにつながる。このため、日本人の読み書き能力は得てして優れている。しかし、規則性を重視しすぎると、口語に含まれる大量の省略や例外、さらには“自殺された”などという常軌を逸した用法などが受け入れられなくなる。だから、日本人の会話能力は相対的に劣ってしまうことになるのだ。

中国に留学する日本人は、得てして本当の友達、特に日本人以外の友達を作ることができない。日本人留学生の交流に大きな影響を与えているのは、その性格である。欧米の学生が日本人に対して感じるのは、とても礼儀正しいが、常に距離感があるということだ。一緒にいても胸の内を語らないので、近寄り難いものを感じるのだという。また、日本人が苦労して勉学に励み、厳格に自律する態度と学習にきちんと向き合う態度は、他国の留学生の多くには完璧主義に映り、付き合い難いと感じさせてしまう。日本人留学生は、他国の友人と付き合わず、同胞との付き合いにより多くの時間を割く。そのため、中国にいる日本人はより固まりやすく、多くのことを共同で決めがちである。もし、一人が教師や同級生に誤った対応を受けたなら、往々にして日本人留学生全員の反感を招いてしまう。